

明治四十年四月一日創刊 令和四年九月一日 通巻第一、三八七号 (毎月一回発行)

# 和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会  
会長 間島 誉史秀

## 北海道神宮献詠 九月兼題 「実(稔)る」

農の人の労苦のありての稔りなる釜につくめしつぶを指にとり食ぶ

豊年の秋の稔りを寿ぎて歌声響く澄み渡る空に

歩くこと立ち上がることに努力してリハビリは実る退院の決まり

思ひ込め詠みける賢治の世界なり百首の歌に実るを嬉しむ

この努力必ず実ると限らずも夢追ひかけて励むも楽し

山歩く母は櫃かやの実に手を触れて熟すと甘いと言ひたり懐かし

新米に彩り添へる黄金色丹波の実りの待ち遠しきよ

手をつなぎ吾子と行く庭のジャガイモの収穫の近きよ葉は黄の色を帯び

娘の畑に実れるまつ赤な大トマト湯むきし美味しくかぶりつくなり

黄緑の宝石をつまみ捻り取る芳しき実りシャインマスカット

盆栽の手入れ怠たり丈の伸び梅の実れり三つ四つ五つ

## 村田俊秋先生

選者 村田俊秋

会長 間島 誉史秀

天位 室岡和子

地位 信田日裕

人位 宮城 涼

秀逸 小川紫織

秀逸 楽間直之

秀逸 遠田信之

佳調 加藤 紀恵子

佳調 南 貴子

佳調 梶谷 久寿美

勝海舟西郷どん肝胆相照らし國を割らずに無血開城

八尾師 絹子

本殿に揺れ流れ来る雅楽の音よ歌舞の人らの努めの実れる

石川 弘子

花落ちてツルは伸び行き地に潜り名前通りに落花生実る

須田 真矢

照りつける夏の日差しに実らぬとも心奪はる南国のパキラ

門前 和幸

もりもりと胡桃が実る屋根の上風が吹きなばリス驚かむ（開拓神社社務所のトタン屋根）

後藤 優美子

百年に一度の大雨耐へてくれ実るリングに悲痛な願ひ（青森の大雨）

中島 正倫

ザアザアと実を落としたる涼風よ空蟬の如し夏を惜しみぬ

吉良 忠誠

気の早い葉はほんのりと色づきぬ秋の足音実りはまぢか

岩間 亜有加

庭の桃の初めて生れる小さな実甘くないねと二つ目を取り（幼き日の実家にて）

片石 辰弥

見渡せばたわわに稔る稲の道車内のわれもこころ豊かに

原 里子

## 総評

天位（室岡 和子）

二週間、意識不明になっていた作者。人工呼吸器をはじめ、医師たちの力で快復し退院。これにつながる本人の努力。歩く、立ち上がるという、からだの動きと、この動きを支える意欲。ここからこの一首が生まれたのだ。本人の書いた作品の文字を見て、うれしくなった。一層、お元気に。

地位（信田 日裕）

宮沢賢治の文学、生を、中学校の教師として生徒と一緒に勉強してきたのだ。そして、その間にあつて賢治に関わることで、生徒の反応を詠み続けてきて、百首になったという。これを生徒と一緒に作りあげてきた「実り」として、私たちに教えてくれている。

人位（宮城 涼）

生きていて様々に出会う。その都度、己を励まし努力を続ける。実を結ばないこともある。しかし、結実することを考えて「夢追ひかけて」とある。積極的に現実肯定者である。明るさをもたう。

秀逸（小川 紫織）

山歩きの好きであった母。いつも作者は同行していたのではないか。ある時、榎の木に触れて、この実は熟すると甘いと教えてくれたという。その母を、その日のことを懐かしく思い出しているのである。熟したのを食べたであろうか。榎はイチイ科の常緑高木。

秀逸（楽間 直之）

丹波の実りとあり、彩りを添える黄金色ともあるので、あの大粒の丹波栗を詠んでいるのだ。上の句は栗ごはんのことであろう。それを食べたくて、栗が手に入ることを待ち遠しく思っているのだ。まさに、食欲の秋の歌。

秀逸（遠田 信之）

庭に植えたジャガイモ。その葉が黄色に変わってきている。収穫の時を教えているのだ。吾子二歳（他の作品が年齢を教えている）と、庭に出てジャガイモのいろいろなを教えているのであろう。場面が見える。

佳調（加藤紀恵子）

まつ赤で大きなトマト。おいしさに決まっている。しかも娘の畑からのもの。これを湯むきにして「かぶりつくなり」とある。大きくかぶりつくのである。おいしいこと、この上もない。おおらかに歌いあげている。食べるみんなの声が聞こえる。

佳調（南 貴子）

シャインマスカット、高級ぶどうである。これを「黄緑の宝石」と言っている。こう述べるくらい、美味で、見た目にも美しいのである。通常の黒ぶどうや白ぶどうの比ではない。幸せな気分になっているのだ。「寶石」であるのに「つまみ捻る」のであるから幸せなのである。自家栽培しているのであろう。

佳調（梶谷久寿美）

大事に育ててきた梅の盆栽。その手入れを怠ってしまったが伸び、揚句には実が三つ、四つ、五つとなったという。実が生るのは普通はうれしいのだが、これは盆栽。奇妙な盆栽を見つめている作者。苦笑いをして。見えてくる。

## 札幌興風会 九月兼題(一) 「峰」

村田俊秋先生選

峰も無く谷間たにあひも無い平らなる地平の木木が地と空を分く(米国中西部は平原)

天位 宮城 涼

評 詞書に米国中西部とある。そして平原と。読者としては想像するのみであるが、峰、谷のないただ真つ平。あ  
るのは木々。これが地と空を分けているという。圧倒される。日本では見られぬ景に己を入れての作。とにかく大  
きい。

コウエンイク? 問ふ吾子を抱へ窓からの蝦夷梅雨にかすむ手稲の峰見る

地位 遠田 信之

評 たしかまだ二歳。その子が公園へ行きたいの意思表示。これを受けての作者は窓へ抱えていき、蝦夷梅雨に  
かすむ手稲の峰を教えたのだ。きっと山の大きさを伝えたのではないか。子と作者とのやりとりが聞こえる。

空に近き大雪連峰が病窓に意識不明の二週間の過ぎ

人位 室岡 和子

評 病に倒れ、意識不明になったのだがその期間は二週間。快復し病窓から目にしたのは大雪連峰。「空に近き」  
とある。自然の大きなたたずまいに、力をもらっている作者なのだ。

冷たさは孤峰が故の寂しさか苔生す岩より名水の湧く(京極町)

秀逸 須田 真矢

盤溪の峰に打ちたる標石は今もあるのか噂も聞かず(飛地境内地の境界を示す石)

秀逸 後藤 優美子

山男は峰に残れる雪を見て季節を当てる古い写真の

秀逸 南 貴子

萬有の命をもやす太陽は峰より上り野を赤く染む

佳調 八尾師 絹子

弟が送りよこせる峰の写真写りてをらぬ笑顔の見ゆる(弟は登山が趣味)

佳調 片石 辰弥

雲の峰の麓を目指し孫二歳野を全力で駆け出してゆく

佳調 信田 日裕

日本一の名峰めざし希望持ち朝日に向かひ手をかざし立つ（懐かしい入社一年時の企業での富士登山で）石川 弘子  
斜里岳の峰の白きが空に映ゆ絶景なりし自室からの眺め（実家の自室） 岩間 亜有加

旭岳峰の残雪光りたり裾野にお花畑の装い

梶谷 久寿美

峰みねをはるかに望む露天風呂車とわが身に感謝わきくる

原 里子

時代劇チャンネルにはまりゐる我よ峰打ちシーンの抜き身に癒さる

加藤 紀恵子

札幌興風会 九月兼題(二) 「傘」

村田俊秋先生選

雨の日も傘を持たずに通す夫結婚前の小さな驚ろき

天位 原 里子

評 結婚前の思い出である。元気なご主人であったのだ。雨が降っても「平気さ」ぐらいの言葉を吐いて傘を持つことをしなかったのだ。ご主人は今、病氣療養中。それだけに以前のように元気になってほしいの思いがあつての作。

バス停で大雨に遭ひ傘を広げ出掛けの断に胸撫で下ろす

地位 宮城 涼

評 この「断」とは「大雨が来るぞ」の判断。これが見事に的中して、バス停で大雨にあつたのだ。雨よ来たれの思いで、自らに大見得をきっている作者が見える。

雨上がりビニール傘を見上ぐるに星空のごとく水滴輝く

人位 片石 辰弥

評 思いもせぬ情景に出会つたのだ。とても小さな詩の世界。しかも作者だけが知っているのだ。雨が止む。傘を見上げるとそこに無数の水滴。これを星空と捉える詩性。この一首はそこから生まれた。

青色の日傘は母の形見なりこれを差しナウナの様な街をゆく

秀逸 梶谷 久寿美

折り畳み傘を開けずに濡れてゐる吾子よもうすぐ十五になるに

秀逸 南 貴子

世界中温暖化にて婦女子たち男子も日傘に日焼けを防ぐ

秀逸 八尾師 絹子

雨だからと言ふも傘差し手を振る妻バックミラーに行つてきますと言ふ(出勤の朝)

佳調 須田 真矢

強風に諦め傘を閉ぢて走る濡れ鼠になり家への道を

佳調 岩間 亜有加

瑠璃色のつゆくさの色のあせをりて日傘でおほひし暑き散歩路

佳調 石川 弘子

木にのぼり狙ひ定めて枝揺らし落とす銀杏広げたる傘へ

後藤 優美子

雨傘はまだ早からう吾子二歳振り回すと危ないかつぱを着なさい

遠田 信之

散歩する日よけの傘を新調す内側上に扇風機の付くを

室岡 和子

やはらかき聚雨に濡るる石畳ねねの道には和傘の似合ふ(京都東山)

信田 日裕

悲しくて傘にかくれてさりげなく雨の中急ぐピンチ時の我

加藤 紀恵子

札幌興風会 九月兼題(三) 「雑詠」

村田俊秋先生選

二週間意識不明となれる我人工呼吸器送管したると

天位 室岡和子

月に一度のランチサロンありがたうのことばの御馳走「おいしかったよ」

(ボランティアのランチサロン)

地位 重川啓子

あちこちのお墓参りをする毎に優しきものに包まれてゆく

人位 原里子

盆を過ぎ冷えた夜風に虫の声潔く去る北国の夏

秀逸 南貴子

良き友と音信の絶え年を経て古い文読み思ひを馳せぬ

秀逸 宮城涼

妻のもとに黒き毛虫を持ちきたる吾子笑顔なり響く悲鳴に

秀逸 遠田信之

「ひかり」より「こだま」に乗りて豊橋へ車窓の景色眺めつつ行く

佳調 梶谷久寿美

米寿のわれ家事がやつとで娘や息子達身内や友がさし入れくださる

佳調 加藤紀恵子

子供らの声久しぶりきこえて来て広場の噴水高く上げれる

佳調 石川弘子

日の本の國のあり方にしへより萬世一系の國體ありぬ

八尾師 絹子

映画館初めて友と二人で行き感想言ひ合ふ時間が楽し

岩間 亜有加

午後七時太田水穂が参拝す夫人とともにほか数名と(札幌神社社務日誌・大正十年八月六日。)

後藤 優美子

うたた寝を網戸から来る冷たさに邪魔されて思ふもう秋なのかと

須田 真矢

会のたより

●八月二十日(土)十時、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、社務所二階杉・檜の間にて十一時から歌会を行いました。

【出席者】村田先生、間島会長、石川、小川、鎌田、信田、八尾師各会員、事務局の遠田、片石各権禰宜、岩間事務員の十名。

●御誕生祝の短冊を贈呈

八月誕生者の小川紫織様には間島会長より御誕生祝の短冊が贈呈されました。茲にお祝い申し上げ、更なるご健勝を御祈念申し上げます。

●信田会員より御菓子を頂戴し、八月二十日の歌会で会員一同で頂きました。ありがとうございました。(事務局・遠田)

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年(一九〇七)四月、当時の札幌神社(現北海道神宮)宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていますが、昭和五十年(一九七五)一月から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の旬祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

歴代の点者(ご指導頂いている先生)は、宮中御歌所参候、小杉榎軒を初代として、御

歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の旬祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。

現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができて見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ちしております。

一、場所 札幌市中央区宮ヶ丘四七四

一、開催 毎月二十日

午前十時より旬祭並献詠祭(本殿)

午前十一時より歌会(慶陽館 あすなるの間)

正午より短歌勉強会(慶陽館 あすなるの間)

一、月会費 三千元(うち玉串料千円)

※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。

一、その他

①毎月二十日、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げています。また、その月に誕生日を迎える方に

も別にお祝いの記念品を贈呈しています。

②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集「興風」を発刊致します。

③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。

④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局 TEL〇二一六二一〇二六二 担当 北海道神宮教化部 遠田(とおだ)

令和四年十月兼題

一、北海道神宮献詠 「書(描)く」

二、札幌興風会兼題 (一)「もみぢ」

(二)「厨(くりや)」

(三)「雑詠」

※締切り 九月二十五日(日) 必着

三、明治神宮献詠 「近」

※未発表歌厳守。締切りは毎月十日ですのでご注意ください。所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四・八五〇五 札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内

札幌興風会事務局

電話 〇二一六二一〇二六二

発行人 間島 誉史秀

編集人 遠田 信之

印刷人 白馬堂印刷(株)